

兼好と「堀河百首」

稲田利徳

組題百首・部類百首の始発であるとともに、百首歌を公的な場のも
のとした、「堀河院御時百首和歌」（以下、「堀河百首」と略称）は、
成立以後、題詠歌の模範として中世歌人に甚大な影響をおよぼしてき
た。

「堀河百首」の成立過程は、伝本にも十四人本・十五人本（除源顯
仲本・除永縁本）・十六人本の三種四類が現存し、かなり複雑である。
が、当初の段階では源俊頼の手によって企画・推進され、やがて源國
信が、中央政界の実力者である藤原公実や藤原顯季などを出詠歌人に
参加させ、さらに題者に大江匡房を招き、長治二年（一一〇五）五月か
ら長治三年三月頃にかけてのある時点に、堀河天皇に奉獻されたと推
定されている。^{注1}

和歌史上における「堀河百首」の重要性にいち早く着目されたのは、
石田吉貞氏で、その成立時期や成立事情を実証的に究明されていた。^{注2}
さらに戦後、峯村文人氏は、「堀河百首」の歌で、二十一代の勅撰集
に入集しているものの状況を詳細に調査したり、俊成がいかにこの百
首を尊重していたかを跡付け、「堀河百首は、中世和歌の起点に位置
せしめらるべき重要な世界を持つてゐた」^{注3}ことを論証されるととも
に、「西行の作風形成」^{注4}の論考などで、西行がいかに「堀河百首」

の歌に影響されていたかを具体的な作品の比較を通して跡付けられた。
その後も、上野理氏^{注5}や松野陽一氏^{注6}などの研究を経ることによ
って、中世和歌史における「堀河百首」の占める位置の重要性が再確
認されていた。

こういった趨勢のなかで、橋本不美男・滝沢貞夫両氏によつて、諸
伝本を博搜しての校本作成・古注集成・総索引・研究と多方面にわた
る考察を集大成した、「堀河院御時百首和歌とその研究」^{注7}が、「本
文・研究篇」「古注・索引篇」の二冊の大著として刊行され、「堀河
百首」研究を大きく前進させるとともに、今後依拠すべき正確な本文
が提供された。その後、この著作を基底にして、竹下豊氏^{注8}などの、
表現に着目しての研究も持続されている。

この稿も、以上の研究成果に示唆を受けながら、中世歌人としての
兼好が「堀河百首」をどのように撰取し、それが作品面にどのような
形で顕現しているかを、「徒然草」と「兼好自撰家集」を対象にして、
具体的に析出することを目論むものである。この作業は、要するに、
中世歌人における「堀河百首」の享受の一面を照射するとともに、兼
好の和歌創作の背後にある素養を抽出することにもなる。

兼好が「堀河百首」を熟読していたことは、後述するように確実で
あるが、その享受の跡を明確に辿つてゆくのは相当に困難である。そ
れは詠歌に際して、「堀河百首」の歌を本歌取といった手法で明確に

取り込んでいないからである。例えば荒木尚氏は「歌人としての兼好論序説」^{注8}に「兼好自撰家集」の本歌取歌五十五首を本歌とともに網羅されているが、その範囲にも、本歌として「堀河百首」に直接に出所を有する歌は一首も見出せない。^{注9}

この結果は、なにも兼好が「堀河百首」の和歌に関心を抱かなかつたことを示唆しているのではなく、当時の歌壇の趨勢のなかにあつて、本歌の対象に「堀河百首」を強く意識しなかつたというに過ぎないのではないかと思う。

そこで、少し論題からはずれるが、中世歌人たちの、「堀河百首」とその作者に対する認識を、当時の歌論書・歌字書の類を通して概観しておきたい。

「正徹物語」^{注10}の「昔の人は、皆堀河院の百首を初心の稽古には読み侍りし也。さりながら堀河院の百首はちと読みにくき題也」との言説からみると、「堀河百首」の百首題は初心のときの題詠の指南書的な役割をもっていたようだ。事実、俊成の「堀河院御時百首題を述懐によせて読みける歌」(長秋詠藻)^{注11}をはじめ、新古今時代の定家や慈円の初学期に、この百首題で詠出した百首が現存し、その後もこの組題百首は百首題の規範となり、多くの歌人が堀河百首題で百首歌を詠歌している。

つぎに注意されるのは、「上代は号古風て三代集のか、りをまなびしかども、堀河院百首人々以来、様々の体をよめり」(「了俊一子伝」)^{注12}というとらえ方である。了俊のこの言説は、一つの風体のみに執着する二条派歌人への批判の証拠だとして、堀河院百首の歌人を持ち出している。これは「堀河百首」の歌人が、幅広い風体を展開した、和歌史上、画期的な歌風樹立者であったことを、人々が等しく認めていたことを暗示する。

さらに問題になっているのは、「堀河百首」の歌人の和歌を本歌取の立場からどう位置付けるかである。二条良基は「本歌には堀河院の

百首の作者までをとる也。同は名人の歌をとるべし。勅撰は後拾遺までをとるべしと申しき。」(「近來風体」)^{注13}と、「堀河百首」の作者までの歌、特に名人の歌を本歌取にしてよいとする一般的な理解を紹介する。この考えは、「愚問賢注」^{注14}で、頼阿に向つて、「本歌をとるには、堀河院の作者までをとる。それ以後はとるべからざるよし申す。此分子細なきをや。證歌には達者のよめる歌をば、近代なりとももちうべきにや」と同様な質問をぶつけている。頼阿はこれに対して、

本歌は後拾遺などまでの歌なり。堀河百首作者も、俊頼朝臣歌など、近來とる事ありと八雲御抄にも見え侍る歟。かの御百首作者も人の口にある名歌などの、それとおぼゆるを取るべきにや。證歌には近世先達歌も引用侍歟。

と慎重に応答、一応、本歌は「後拾遺集」頃までの歌で、「堀河百首」の作者の歌は、人口に膾炙された名歌に限るべきかとする。

やや時代が下つて正徹の頃になると、「堀河院の作者は、たとひ近來の勅撰に入りたりとも、本哥にて有るべきなり。堀河院作者の哥の勅撰に入らぬは、證哥とはなる也。本哥にてはあるまじき也。」(「正徹物語」)と勅撰集入集の「堀河百首」歌人の歌は本歌となるが、入集しない歌は本歌としないとの見解も開陳している。

以上の状況を勘案すると、二条為世門の歌人であつた兼好は、おそらく頼阿と同じ態度、即ち、本歌は「後拾遺集」頃までの歌で、「堀河百首」の作者の歌は、特に人口に膾炙された名歌に限られると認識していたと推測される。

先にも触れたように、兼好の和歌に、「堀河百首」を出所とする歌を本歌にした本歌取歌が抽出されていないのも、彼のこういつた態度とかかわっているように思う。

ただ、本歌の対象としないことが、そのまま「堀河百首」の享受の稀薄さを示唆するものではない。「徒然草」や兼好の和歌作品に当たってみると、その表現や和歌の発想などに、隠微な形ではあるが、「堀河百首」の影響の跡が辿られるように思う。

兼好が「堀河百首」(以下「百首」と略称することもある)に目を通していたことは、次の「徒然草」^{注15}第二十六段から窺える。

風も吹きあへずうつろふ人の心の花に、なれにし年月を思へば、あはれと聞きしことの葉ごとに忘れぬものから、我が世の外になりゆくならひこそ、亡き人のわかれよりもまさりてかなしきものなれ。

されば、白き糸の染まん事を悲しび、路のちまたのわかれん事をなげく人もありけんかし。堀河院の百首の歌の中に、

むかし見し妹が^{増根}増根は荒れにけりつばなまじりの葦のみして
さびしきけしき、さる事侍りけん。

この章段は、前段の「飛鳥井の淵瀬常ならぬ世にしあれば、時移り、事さり、樂しび、悲しびゆきかひて、花やかなりしあたりも人すまぬ野らとなり、変らぬ住家は人あらたまりぬ。……」と、無常思想を前提にして、時の経過とともに、刻々と変化、衰滅してゆく世の実相を、哀感を湛えて叙述した連想で、人間の内部を凝視、その心の移ろいやすいさまを通して、別離の悲しさを綴っている。ここで「堀河院の百首」にあるとする「むかし見し」の歌は、確かに「堀河百首」の「葦菜」歌題の最初に、藤原公実の歌としてみえる。この歌は勅撰集の類に入集していないので、^{注16}兼好は「堀河百首」から直接引用したもので、彼が「百首」を披見していた有力な証拠となる。しかも兼好は、この歌に対して、「さびしきけしき、さる事侍りけん」と記しているように、作者公実の実体験であるかのように受け取って深く感銘している。

公実の歌は、昔愛しあつていた女の家の垣根のあたりが、今ではすっかり荒れ果ててしまい、ただ茅花にまじつて葦の花が咲いているばかりである、との意で、「家持集」の

つばなぬくあさぢがはらのつばすみれいまさかりにもしげきわがこひ(三九)

を本歌とするとされる。^{注17}

「堀河百首」^{注18}の「葦菜」歌題歌十六首をみると、その多くは、雲雀あがるとぶひの原に我ひとり野面にさける葦をぞ摘む

(仲実・二四七)

のように、春の野に葦を摘む行為を詠じた歌であり、葦を荒廢の状況の中でとらえたのは、公実の歌のほかには、

あさぢふやあれたるやどのつばなたれむらさきの色にそめけん

(藤原顕仲・二五〇)

あれにける宿のそとの春ののに葦つむとてけふもくらしつ

(隆源・二五三)

の二首のみだが、この二首も公実歌のように、荒廢した場所がかつて自分とかかわりのあつた対象としてとらえ、そこを懐古の気持で抒情する方向をとっていない。

公実が荒れた増根に着目したのは、「和漢朗詠集」^{注19}の「故宮付破宅」の「暮鳥栖風守ニ廢籬」や「荒籬見」露秋蘭泣」などの漢詩句からヒントを得たのかもしれないが、その荒廢した増根を、かつて馴れ親しんだ恋人の屋敷に設定したことが、兼好の嗜好にマッチしたのではなからうか。

「徒然草」第二十六段は、古歌や故事を巧妙に織り込んで、しみじみした哀韻を湛えた叙述となっているが、それは人との死別ではなく、親密に接してきた人との別離から生じるものである。この段を読むと、「兼好自撰家集」^{注20}の

たのもしげなることいひてたちわかる、人に

はかなしやいのちも人のことの葉もたのまれぬ世をたのむわかれは

(三八)

つらくなりゆく人に

いまさらにかはるちぎりとおもふまではかなく人をたのみけるかな

(四八)

の歌を連想するが、かつて臆測したように^{注21}兼好には、愛し合った女性との切ない別離の体験があったのではなからうか。その体験をバツクにして第二十六段が執筆されたように思われる。「たのもしげなること」を言い残して去ったことが、「我が世の外になりゆく」ことであり、その後時を経て、荒廃した恋人のいなくなつた屋敷を見ることがあり、ふと公実の歌を想起してここに記した、「さる事侍りけん」とは同時に兼好自身の体験と二重映しになっているように思えてならない。

換言すれば、「徒然草」に公実歌を引用したのは、単なる術学的な次元のものではなく、まさしく兼好の体験や嗜好とマッチした内容を有していたことによることである。

「しづかに思へば、よろづに過ぎにしかたの恋しさのみぞせんかたなき」(第二十九段)といった懐古的態度は、「徒然草」の世界を底流している。兼好が時間や歳月の進行にいかにも過敏であつたか、彼を感傷に誘うのは歳月への思い、懐旧の情であること、このことは兼好の思惟と表現を考えると、不問に付すことのできない重要な問題であることに關しては、三木紀人氏の卓論があるので^{注22}ここでは繰り返さない。

公実の歌は、「むかし見し妹が塙根は荒れにけり」に荒廃を通して、哀切な懐旧の情を誘発させ、下句の「つばなまじりの莖のみして」は、茅花のなかの小さな紫色の莖をかそけく点描し、余韻をもたせながら言いさしているあたり、兼好の思惟と嗜好に見事に適合している。兼好はこの歌を自己の理念に引き寄せ、やや深読みしている気配も感ぜられなくはないが、これが代々の勅撰集に入集されなかつたのは不思議であり、逆にこの歌に魅力を感じた兼好の詩的感性の鋭敏さも示唆している。

「徒然草」には、他に「堀河百首」歌を引用したものや明確に引歌

としているものは見当らない。これは先述したように、「百首」の歌を本歌や引歌の対象として強く意識していないことにもよる。但し、仔細に吟味してゆくと「百首」の和歌の表現が、ごく自然に融合していると思える表現はいくつか散見される。その事例として、いわゆる王朝的章段とされている、第四十四段をとりあげてみる。

あやし竹の編戸のうちより、いと若き男の、月影に色あひさだかならねど、つや・かななる狩衣に、濃き指貫、いと故つきたるさまにて、さ・やかなる童ひとりを具して、遷なる田の中の細道を、⁽¹⁾ 稲葉の露にそぼちつ、分け行くほどに、(中略) ⁽²⁾ 心のま、に茂れる秋の野らは、置きあまる露に埋もれて、蟲の音かごとがましく、遣水の音のどやかなり。

この傍線(1)の「稲葉の露にそぼちつ、」は、「堀河百首」の

田家

をやま田の稲葉の露にそぼちつつ人めもる身はくるしかりけり

(顯季・一五〇九)

の歌の措辞を借用しているとみてよい^{注23}(もつとも、顯季のこの歌自体は、「ほにもいであぬ山田をもると藤衣いなばのつゆにぬれぬ日ぞなき」(古今集・秋下・よみ人しらず・三〇七)を踏んでいるが)。ただ「源氏物語」^{注24}(夕霧)にも、

萩原や軒端の露にそぼちつ、八重たつ霧をわけを行くべき

という歌もあり、「分け行く」からみて、両歌を合成したような表現になっている。露に濡れながら道を分け行く構図は、この他、分け来つるをささのつゆにそぼちつほしぞわらづらふすみぞめの袖

(山家集・九一八)

秋ならば稲葉の露に濡れなまし早苗を分くる小田の細道

(寿永二年以前) 或所歌合^{注25}

ゆふぐれの稲葉の露を分けきても宿の哀を人のとへかし

(王二集・九四四)

などもあり、かなり類型的な表現になつてはいるが、やはり「堀河百

首」の表現が一番近似する。ただし、注意すべきは、「百首」の歌は「稲葉の露にそほつ」行為を苦しい状況として設定しているのに対し、兼好は、しつとりと濡れ通るような情緒を醸成させるものに変容して取り込んでいることである。

さらに傍線部(2)も「堀河百首」の、

山家

とふ人もなき山ざとの浅ぢふは心のままにしげりこそすれ

(紀伊・一五〇三)

と、「古今集」^{注6)}、

さとはあれて人はふりにしやどなれや庭もまがきも秋ののらなる

(秋上・暹昭・二四八)

とをアレンジし、人影のない場所に、自然に繁茂した秋の庭を描く。

草木が「心のままにしげる」という表現は、「堀河百首」以後、

人めなくあれ行くやどは夏草の心のままにしげる庭かな

(宝治百首・俊成女・一〇三六)

夏草は心のままにしげただむすぶばかりの庵にもせむ

(宝治百首・少将内侍・一〇三七)

草も木も心のままにしげただわがかくれ家を外にもとめじ

(文保百首・為相・一五二八)

と散見し、これまた典型的になつてくるが、いづれも「堀河百首」の影響を受けていよう。

「堀河百首」のこの歌は、「心のままに」繁茂するさまを、訪れる人もいない山里の寂寥さを際立たせるものとして描いているが、兼好はそれを、「心のま、ならず作りなせる」(第十段)姿勢を批判し、自然に任せた姿を肯定するという自己の理念に引き寄せて取り込んでいる。

「堀河百首」が中世歌人に迎えられた一面に、山家・田家などの歌題歌で、田園や山里の景色を自在に詠み込んだ点があるとされるが、^{注8)}兼好はいち早く、この「百首」の特色を見抜き、自己の表現に撰取し

ている。けれどもそれは、もはや引用の次元を越え、自身の表現・文脈のなかに融解させている。この現象は同時に、兼好が「百首」を深く読み込み、自己の嗜好にあつた歌や措辞を記憶し、自家薬籠中のものとして駆使していたことをも暗示している。

「堀河百首」を、第四十四段のように隠微なかたちで撰取したとおぼしい例として、あと一つ、第三百三十七段をとりあげてみる。

「花はさかりに、月はくまなきをのみ見るものかは」で始まる、この著名な段には、「万の事も、始終こそをかしけれ。男女の情も、ひとへに逢ひ見るをばいふものかは。逢はで止みにし憂さを思ひ、あだなる契をかこち、長き夜をひとり明かし、遠き雲井を思ひやり、浅茅が宿に昔を偲ぶこそ、色好むとはいはれ」と、理想的な「色好み」の心情を記した箇所がある。このなかの傍線部「逢はで止みにし」は「堀河百首」の、

不逢恋

思ふ事ありその海のうつせ貝あはでやみぬる名をや残さん

(師頼・一一五六)

の歌の措辞と一致する。^{注9)}もつともこの措辞は、「拾遺集」に、

すぐろくのいちばにたてるひとつまのあはでやみなん物にやはあらぬ

にもみえるので、「百首」からの直接の影響とは断定できないが、参考程度にはなろう。

第三百三十七段では続いて、「若きにもよらず、強きにもよらず、思ひかけぬは死期なり。今日まで逃れ来にけるは、ありがたき不思議なり。暫しも世をのどかには思ひなんや」と死期の突発性を強調する文章がある。この傍線部の無常認識の叙述の仕方は、「堀河百首」の、

無常

けふとて世をのどかには思はねどあすしらぬ身を哀なりける

(河内・一五六八)

と類似する。このことは早く「徒然草文段抄」も指摘している。近似の表現は、「古今六帖」(一〇〇六)にも入集している、伊勢の、

盤の上をすみかにしたるあしたづは世をのどかにも思ふべきかな

(伊勢集・一八六)

にも一例みえるものの、他に用例をみない。このケースは、常日頃読みなれてきた「百首」の「無常」歌題の歌の措辞が、兼好の筆に乗って記されたのかも知れない。因みに「徒然草」には、「世を長閑に思ひて打ち怠りつ、先さしあたりたる目の前の事にのみまぎれて月日を送れば」(第百八十八段)ともみえる。

以上、「徒然草」の第四十四段や第百三十七段の表現に、「堀河百首」の和歌の措辞と類似する箇所を四例ほど摘出してみた。ただし、執筆に際し、兼好の脳裡に、各々の「百首」の歌が意識されていたかどうかは確証がない。いつも読み込んでいた「百首」の和歌の措辞が無意識裡に表現に融化したケースもあるだろう。が、それはそれで兼好の「堀河百首」の影響ということでは意味をもつ。

こういった表現次元まで下つてきて、「徒然草」と「堀河百首」を仔細に比較すれば、他にもいくつか指摘できようが、このあたりにとどめたい。^{注30}

なお「堀河百首」の影響ということでは、「徒然草」第十九段の「折節の移りかはるこそ、ものごと哀なれ」でとりあげられた四季折々の風物とその描写が、「百首」の歌材とかなり重なって行くことも問題になろう。また、第一三九段の「家にありたき木は」でとりあげられた草木が、「百首」の草木花の世界に近似することは、かつて触れたこともあるので^{注31}ここでは再説しない。

三

次には兼好の和歌に「堀河百首」がどのように投影しているか、この方面の吟味を行ないたい。対象とする和歌は、「兼好自撰家集」だ

けでなく、それに収載されていない勅撰集や私撰集入集歌、「民部卿家褒貶歌」^{注32}など、合せて六十三首も含めた全歌とする。引用本文と番号は、『兼好法師全歌集総索引』^{注33}に依拠し、適宜、濁点などを付して解読しやすくした。

兼好の本歌取歌には、直接「堀河百首」に出所をもつ歌を本歌にしたものは見当たらない。これはすでに触れたように、本歌は主として「後拾遺集」頃までの歌とし、「堀河百首」およびその作者の歌は、相当著名なものでないと対象としないという、当時の二条派歌人の共通した意識によるものであろう。

しかし、すでに「徒然草」で探索したように、兼好は「百首」を熟読し、その歌の措辞を自家薬籠中のものとし、自分の文章に融合させていた気配が察せられた。この事実を念頭にすると、「百首」の歌が彼の和歌の世界にも、なんらかの影を落としていることは予測される。従って以下に展開する記述は、かなり臆測の域をでないものもあるだろう。

まず「兼好自撰家集」(以下、「自撰家集」・「家集」と略称することがある)の歌題からみると、「民部卿殿にてをのく歌よみてほめそしることありしに」の詞書で、「立春(一一〇)から「寄橋恋」(一二七)まで、十八首が連続して配列されている歌群が注意される。十八首のうち四季題は、「立春・若水・早蕨・帰鴈・盛花・初郭公・五月雨・泉・蘭・駒迎・松虫・爐火・網代」であるが、このうち傍線を付した歌題は、「堀河百首」の歌題と一致、特に「泉」や「爐火」は「堀河百首」での初出歌題である。この民部卿家褒貶歌の歌は(内閣文庫本「民部卿家褒貶歌」と関連がある)、民部卿為定郎での幾度かの歌会詠から撰歌されたものである。従って、この歌会でのある時に、「堀河百首」の歌が提出された可能性がある。そういえば、「民部卿家褒貶歌」の方にも、「蓮」「氷室」「杜若」など、「百首」を特色付ける珍しい歌

題が散見される。このように二条為定邸の歌会に「堀河百首」の歌題が提出され、兼好もそれによって詠作したことのあることは間違いない。まずは、このことを確認しておく。

最初に兼好の和歌に詠み込まれている歌枕や地名が、「堀河百首」のそれと関連を有すると思われるものから検討する。

氷室

万代を松が崎なる氷室とやためしに春は立はじめけむ

(民部卿家褒貶歌・三七)

この歌は「氷室」と「松が崎」を結合させ、正月朔日の「氷様(ひのためし)」を踏んだ立春詠である。勅撰集に「松が崎」なる地名は、「拾遺集」に「ちとせふる松がさきには」(元輔・六〇七)、「つるのすむ松がさきには」(兼盛・六一七)に二首みえるが、以後絶えて表われない。

私家集には若干みえるものの、松の縁を万代とかかわらせた賀の歌で、「氷室」と結びつけたものは、まだ見出してない。「氷室」という歌自体も「千載集」には二首ほどあるものの少ない。しかし「堀河百首」には、

夏の日もすずしかりけり松が崎これや氷室のわたりなるらん

(顕季・五一七)

氷ゐて千年の夏も消えせじな松がさきなるひむろとおもへば

(肥後・五二六)

と二首も「松が崎」と結合した「氷室」歌題歌がみえる。兼好が「氷室」の歌題に対して、「松が崎」なる地名を詠出した背景に、「百首」の歌が念頭にあったと考える。特に、肥後の歌の「千年の夏も消えせじ」の発想は、「松が崎」の「氷室」と「万代」を関連付けた兼好の歌の発想と近似する。

寄湖恋

心をぞこほりとくたくすはのうみのまだとけそめぬ中のかよひぢ

(自撰家集・二二五)

いくら心を千々に砕いても、恋人は少しも打解けてくれない苦しい恋情を、信州の諏訪湖の氷と関連付けた歌である。歌枕として「諏訪の海」は、勅撰集には一首も見当らないように、あまり取材されていないが、「堀河百首」には、「凍」の歌題で、

すはの海の氷の上のかよひぢは神のわたりてとくるなりけり

(源顕仲・九九八)

と諏訪湖に取材した歌がある。この歌は「諏訪御渡十二月晦夜云々神わたりのなきまへには人馬ことごとく氷のうへを自由にかよふといへり」(堀河院百首問書)註²⁴と注解されているが、諏訪湖の氷堤は諏訪明神御神幸の跡とされ、春先に明神が通つてゆけば解けるといふ俗信を背景に詠じている。顕仲の歌は、特殊な民俗信仰に取材して印象深いためか、西行もこの歌を念頭に、「寄氷恋」の歌題で、

春をまつすはのわたりもあるものをいつをかぎりにはすべきつららぞ

(山家集・六〇七)

と、同じく藤原為家も「こほり」で、

すはのうみの冬の氷の通ちや神のむすべるちかひなるらん

(新撰六帖・四六三)

と詠じている。先の兼好の歌も、「すはの海」「かよひぢ」が一致するだけでなく、「まだとけそめぬ」は、「神のわたりてとくる」という発想を受けており、明らかに「堀河百首」の歌を念頭に詠歌している。これは本歌として認定してよいものかもしれない。

さて「自撰家集」には「網代」歌題詠が二首ある。うち一首は「もののふのやそうぢ河のあじろもるころ」(二二二)で、宇治川のものであるが、他の一首は、

網代

しるべせよたなかみ河のあじろもりひをへてわが身よる方もなし

と「田上河」の網代に取材している。

(自撰家集・二八二)

八代集に、「網代・網代木」を詠じた歌は十六首あるが、固有名詞の河の名を詠み込んだものは、「宇治川」が五首、「田上川」が一首。この結果が象徴するように、他の網代の歌を収集してみても、河としては「宇治川」が圧倒的に多く、稀に「田上川」「吉野川」などがみえる程度。もつとも「田上川」は、「拾遺集」に、

月影のたなかみ河にきよければ網代にひをよるも見えけり

(雑秋・清原元輔・一一三三)

とみえるのに、以後あまり多く継承されない。ところが「堀河百首」の十六首の「網代」歌題歌をみると、固有名詞の川は、「田上川」が六首、「宇治川」が二首と、和歌の常識と逆の結果になっている。しかもその歌は、

田上の瀬瀬のあじろに日へつつわが心さへよするころかな

(国信・一〇二七)

風ふけば田上川のあじろ木にみねの紅葉も日へてぞよる

(仲実・一〇三二)

ゆふだたみ田上川のあじろ木のめぐらにひをもくらす比かな

(藤原顕仲・一〇三四)

の例歌にみるように、いずれも「日へて」に「氷魚」を掛けているなど、兼好の歌の「ひをへてわが身よる方もなし」と同じ修辭をとっている。「田上川」と「網代」の取り合せ、「ひをへて」の修辭の一致などからみて、兼好の歌には、先の「堀河百首」の網代の歌が投影しているように思われる。

以上の三例は、地名・歌枕にかかわるものであったが、「氷室」に対して「松が崎」、「湖」に対して「諏訪の海」、「網代」に対して「田上川」と、いずれも珍しい結合ケースであった。そこに「堀河百首」を証歌にして、若干の新味を出そうとした兼好の詠歌姿勢も窺える。次に歌材の方面の影響の痕跡を辿っておく。

「堀河百首」の歌材と兼好の歌材とが重なるものが多いのは言うま

でもないが、影響という点になると確証を得ることは難しい。ここでは「たなれの駒」と「千引の石」の二つだけをとりあげる。

「たなれの駒」とは「手慣れの駒」で、よく飼いならした馬のことだが、八代集では、

わがかどのひとむらすすきかりかはん君がてなれのこまもこぬかな

(後撰集・恋二・小町が姉・六一六)

ゆふぎりにさののふなばしおとすなりたなれのこまのかへりくるかも

(詞花集・雑上・左大弁俊雅母・三二八)

の二首だけで稀少。「堀河百首」以前では、「源氏物語」(紅葉賀)で源内侍が詠じた、

のがひにもはなちやせましまもぐさたなれのこまのどけからぬを

(四四七)

などが目にとまったが、稀少であることに変わりはない。兼好には、

夏のゆくたなれのこまのむねわけになつむばかりもしげるくさ哉

(自撰家集・二二三)

の歌があるが、これは「堀河百首」の「春駒」の歌題歌の

わがせこが手馴れし駒も沢にあって春のけ色はあしげなるかな

(肥後・一九〇)

水のべのまこも今は生ひぬればたなれの駒をはなちてぞみる

(紀伊・一九二)

などの歌の感化があるのではなからうか。「なつむ」という語も、「百首」の「春駒」に、

冬がれになつみし駒もはるくればいはゆばかりに成りにけるかな

(河内・一九二)

とみえ、冬枯れに「なつむ」駒を、兼好は夏草に「なつむ」駒に転じているようにも思える。

兼好の歌には、

こぐらくに往生すべき事などとくをききて

ふねしあればちびぎのいしもうかぶてふちかひのうみに浪たつなゆめ

(自撰家集・一四三)

と「千引の石」という珍しい素材を詠じたものがある。「千引の石」は「万葉集」^{注35}に、

わが恋は千引の石を七ばかり首に繋げむも神の諸伏

(巻四・七四三)

と一首みえるのが初出で、「堀河百首」にも、これから取材して、

祝詞

きみが代は千びぎの石をくだきつつ万代ごとにとれどつきせじ

(源頭伸・一五九二)

とみえる。「千引の石」はこの他に、

君がためゆだのをわけてひろひつるちびぎの石にたれかあふべき

(散木奇歌集・七二七)

の歌をはじめ、「永久百首」(忠房・五一六)・「俊忠家歌合」(仲実・二四)など院政期歌人の歌に散見されるものの極めて珍しいものである。兼好がこの珍しい「千引の石」を持ち込んだのは、「万葉集」からの可能性もあるが、やはり直接には「堀河百首」からではなかったかと思う。

四

最後に、兼好の和歌の発想が「堀河百首」の歌に、なんらかの意味で影響を受けていると思われるものを吟味する。

発想の近似性は、措辞の方面の摂取の裏付けがあれば影響関係が確証できるが、それがない場合は、単なる偶然によることもあり、断定をくだすことは危険である。そのあたりのことにも配慮しながら、以下、歌材に即しながら事例を列挙したい。

まずは「山吹」歌題歌から。

よしの川いほすなみにかけ見ればちるにつきせぬやまぶきのはな

この歌は岩を越える波に映る岸の山吹を、一見、散った花かと錯覚するモチーフに支えられている。白波の飛沫に映じて散っているように見えるが、実際は散っていない光景に着目して「ちるにつきせぬ」と凝縮表現にしたところに智的な趣向がある。吉野川の山吹としては、「古今集」の、

吉野河岸の山吹ふくかぜにそこの影さへうつろひにけり

(春下・貫之・二二四)

の歌の系譜にたつ。兼好はこの「古今集」を念頭に逆発想に詠じたのかもしれないが、「ちるにつきせぬ」の措辞と発想は、他の歌集にも見当らぬ珍しいものである。

ところが「堀河百首」には次のような発想をとる「山吹」歌題歌がある。

いはねよりかけつつ水はあらへども色もかはらず岸の山吹

(源頭伸・二九四)

ゆく水にきしの山ぶきうつれども底のほひはながれざりけり

(藤原頭伸・二九八)

この「くども——しない」という、「逆接→打消し」の構文と発想は、兼好の歌の「ちるにつきせぬ」(散ってはいるけれども尽きない)という発想と重なる面がある。兼好はこの発想を「堀河百首」から得た可能性も考えられる。

次は「蓮」の歌題歌。

共にちる露はしばしもやすらはではすの立葉に花ぞとまれる

(民部卿家褒貶歌・三六)

傍線部「はすの立葉」は、

風ふけばはすのうき葉に玉こえて涼しくなりぬ日ぐらしのこゑ

(散木奇歌集・三二二)

などの「はすの浮き葉」(水面に浮いている蓮の葉)に対して、水面の上

一本ずつ立っている蓮の葉のことで、

小舟さしたをりて袖にうつし見んはすの立葉の露の白玉

(長秋詠藻・二九)

雨そそくはすの立葉にゐる玉のたまらぬ物は涙なりけり

(後鳥羽院御集・七三九)

などはじめ、諸歌集に若干散見されるが、これらは「堀河百首」の、

雨ふればはすのたち葉にゐる玉のたえずこぼるる我が涙かな

(俊頼・五〇四)

からの影響にたつと思う。この俊頼歌は、蓮の立葉に雨が降ると玉が絶え間なくこぼれるさまを「たえずこぼるる」の序詞的に用いている。兼好の歌は、この俊頼歌から「はすの立葉」の歌材を取りこんだだけでなく、「露はしばしもやすらはで」散ると、「たえずこぼるる」と同じ方向でとらえる。ただ、花と露は共に散るが、花びらの方は立葉にとまつていると想定したところに新味が付与されている。これは俊頼歌を念頭にして詠出したとみなしてよい歌である。

霜の降る夜には自然に鐘が鳴り響くのは、中国の故事による。「和歌童蒙抄」^{注36}(巻六)の「霜まつかね」の項には、「山海経曰、豊山有九鐘。是和霜鳴。郭璞注曰、霜降則鐘鳴。故如言也。物有自然感。不可為也。」を引用する。八代集に鐘を素材にした歌は二十六首ほどあるが、この故事に依拠した歌は、「千載集」の、

はつ霜やおきはじむらん眺のかねのおとこそほのきこゆなれ

(冬・大炊御門右大臣・三九七)

(冬・匡房・三九八)

の二首のみ。前歌の「大炊御門右大臣」、即ち公能のは、匡房の歌の上句と下句を逆にした模倣歌にすぎない。実は「千載集」に入集したこの匡房の歌は、「堀河百首」の「霜」歌題の歌である(九一四)。「和歌童蒙抄」(巻一)でも、匡房の歌を引用し、「堀河百首に匡房卿の

よめる也。もろこしに豊山といふ処有。その峯に鐘あり。霜のくだるをまちてなる也」と注する。「江帥集」には、

316 ゆきふればたかくなりけりかずかやま

いかなるしもにかねびくらん

の連歌もみえる。この鐘と霜の中国故事に依拠した歌は、「玉二集」(一八二)、「拾遺愚草」(三三五〇)などにも散見するが、いずれも「堀河百首」の匡房の歌の影響下にある。この故事を和歌の世界に持ち込んだのは、匡房が最初だったのかもしれない。兼好の、

春ちかかかねのひびきのさゆるかなこよひばかりとしもやをくらん

(自撰家集・二二六)

の歌も、以上の考察から判断すると、やはり匡房の歌を念頭にしての詠歌とみてよからう。荒木尚氏^{注37}富倉徳次郎氏^{注38}も共に、「千載集」の匡房歌を本歌に指摘している。兼好の歌は、春もま近い頃の鐘の音をとらえ、霜ももう今夜限りだと置いていろいろと推測し、匡房歌から一步離れて新味を出している。

「自撰家集」には「たかがり(鷹狩)」の歌題歌が連続して二首あるが、うち一首は次のもの。

すゞのをとはちかくきこえてはしたかのしげみの木ぬにかくれつるかな

(二〇三)

この歌の「すゞ(鈴)」とは、鷹の尾ぶさにつける鈴のこと。鷹狩の歌は八代集に十余首あるが「鈴」を取り込んだのは、「千載集」の、

ふる雪にゆくへも見えずはし鷹のをぶさのすずのおとばかりし

(冬・隆源・四二二)

の一首だけだが、これは「堀河百首」の歌である(一〇六九)。「古今六帖」の「こたか」「はしたか」にある八首中にも「鈴」はみえない。このように「堀河百首」以前に、鷹狩の歌に「尾ぶさの鈴」を持ち込んだ歌は稀少のようだ。その点、「堀河百首」には、先の「千載集」入集歌のほかにも、

はしたかのしるしの鈴のちかければかくれかねてや雉子鳴くらん

(河内・一〇七二)

の歌など五首もある。この歌と兼好の歌を比較すると、「はしたか」「鈴」の素材結合が一致するだけでなく、鈴の音が近く聞えることで(主体こそ相違するが)「かくれ」る行為も近似し、影響を受けた可能性もある。

さて、「爐火」という「堀河百首」の歌題は、先にも触れたように、「百首」に初めて登場した珍しいもので、「和漢朗詠集」から採用したものである。「正徹物語」に「爐火の題にては埋火をも焼火をも読む也。埋火の題にては爐火をば読まぬ也」とあるように、和歌では「ろか」とはよまれず「うづみ火」とよまれる。「堀河百首」の十六首の「爐火」の歌は、すべて「うづみ火」として詠じている。兼好にも「爐火」歌題で、

うづみ火のあたりは春とおもふ夜のおくるひさしきねやのうちかな

(自撰家集・二二二)

と「埋火」を詠じた歌がある。この歌は「後拾遺集」の、

うづみびをよめる

うづみびのあたりはるの心地してちりくるゆきを花とこそみれ

(冬・素意法師・四〇二)

の本歌取歌されている。確かに上句の措辞、発想は酷似し、その可能性はあるだろうが、上句が酷似しているわりには、下句における本歌の転換具合が明らかでない。兼好の歌は、埋火の辺は春と思うのに、夜がなかなか明けない、やはり冬の長い夜かと慨嘆しているが、「後拾遺集」の歌は、埋火の辺の春の心地を前提に、降る雪を落花と見る発想であり、次元がちがっている。こうみてくると上句の酷似は偶然の一致で、兼好の歌は、別の方面からヒントを得た発想であるとの推測も可能である。

「和漢朗詠集」の「爐火」の漢詩句には、

此火応鑽花樹取。対来終夜有春情。(菅三品)

と、埋火と春の気分を関連付けたものがある。この漢詩句の影響もあってか、「堀河百首」には、

驚のなかぬばかりぞうづみ火のきえせぬ宿は春めきにけり

(師時・一〇九七)

と「埋火」のある宿は「春めきにけり」とする発想歌がある。従って、兼好の先掲の歌も「百首」の歌からヒントを得た可能性もある。

最後に「杜若」の歌を取りあげる。

「杜若(かきつばた)」そのものは、「万葉集」以来、歌材とされ、「古今六帖」などにも見えるが、いわゆる歌題として明確に設定した歌は意外に少なく、勅撰集では「金葉集」に一首あるのみという。「八雲御抄」^{注40}(卷三)は、「杜若」に対し、「池によめり。かきつばたとて、かきによせてもよめり。其も不離水敷」とあるように、「かきつばた」から「垣」を連想して詠出されることが多く、「古今六帖」の君がやどわがやどわけるかきつばたうつろはんとき見ん人もがな

(貫之・三八〇二)

の歌などはその早い例である。兼好も「杜若」の歌題で、影うつすあさかのぬまのかきつばた水のご、ろはへだてざりける

(民部卿家褒貶歌・五五)

と、「垣」を連想し、「水の心」は隔てないと詠じている。

一方、「堀河百首」の「杜若」歌題歌十六首中には、「垣」と関連付けた歌が五首ほど散見するが、その中には、

には鳥のすだくみぬまの杜若人へだつべきわが心かな

(俊頼・二六四四)

もろともふしみのさとの杜若心ばかりはへだてざらん

(肥後・二七〇〇)

杜若おなじさはべにおひながらなにをへだつる心なるらん

(河内・二七二二)

のごとく、心を隔てることを発想の核にした歌がある。兼好の歌は、これらの「人の心」の「隔て」を念頭にし、「安積香山影さへ見ゆる山の井の浅き心をわが思はなくに」(万葉集・卷十六・三八〇七)の歌を背景に、「水の心」は隔てないと反措定したのではなかるうか。その点「堀河百首」の影響下にある歌とみなしてよい。

これまで兼好における「堀河百首」の撰取状況を、「徒然草」と和歌の世界に分け入って辿ってきた。「徒然草」に引用の公実の歌により、兼好が「百首」を披見していたことは確実で、しかも「徒然草」に鏤められた意匠を凝らした表現には、「百首」の和歌本文を自在に取り込んでいえると思しいものが幾箇所指摘できた。

この事實は、彼が「百首」を熟読、玩味して、自家葉籠中のものにしていくことを示唆している。しかもその撰取したものは、「百首」の中の表現機能とは別のものに変容させたり、彼の美的理念に引き寄せた方向で駆使している傾向もあった。

続いて、これを前提として和歌の方面の撰取の様相を、個々の作品に即して具体的に分析する作業を試みた。が、そこには本歌と本歌取といった関係にあるものは稀少で、強いてそれに類するものをあげる とすれば、諏訪湖の中の通い路と鐘と霜の中国故事に依拠した歌程度である。

けれども「堀河百首」の兼好に及ぼした影響は、露骨に顕在化してはいないが、和歌詠作の素養として看過できないものがあった。そのことは、「氷室」と「松が崎」、「網代」と「田上川」などの例のように、伝統的な素材結合からやや逸脱したものである、その証歌を「百首」の中に定めていたり、「蓮」「杜若」「爐火」などの「百首」特有の歌題などに対したときは、やはり「百首」の歌にその発想契機を求めていることなどでも窺うことができた。

論及に際しては、いささか飛躍した推測や強引さもあつたが、要す

るに歌人兼好にとつて「堀河百首」は、和歌詠作の基盤・素養として種々な面に影響を与えていた作品であることは論じ得たかと思う。

なお、兼好は、「堀河百首」の諸本のうち、どんな伝本を披見していたかも問題にはなるが、それを決定付ける根拠も見出していないので特別に論及することはしなかつた。ただ、「金葉集」「詞花集」「続詞花集」などが撰歌対象にしたのは、十六人本「堀河百首」であつたという見解^{注41}を念頭に、十六人本を想定して調査を進めたことを付言しておく。

注1、橋本不美男、滝沢貞夫両氏著『本堀河院御時百首和歌とその研究』^{本文篇}の研究篇の説。

2、「堀河院百首の成立その他について」(国語と国文学・昭9・9)。後に

『新古今世界と中世文学上』に収録。

3、「堀河百首と中世和歌」(国語・昭28・9)。後に、日本文学研究資料叢書

『新古今和歌集』に再録。

4、「言語と文芸」(昭39・7)。

5、「堀河院御時百首の歌めしける時」(国文学研究、第32号、昭40・10)、「俊頼と堀河百首歌」(文学・語学、第42号、昭41・12)。

6、「組題構成意識の確立と継承」(文学・語学、第70号、昭49・1)。

7、「堀河百首」の成立事情とその「性格」(女子大文学・第36号)、「堀河百首」と出詠歌人の別詠」(同、第37号)、「永縁と『堀河百首』」(同・第38号)。

8、「熊本大学『法文論叢』」(昭32・6)。後に、日本文学研究資料叢書『方丈記・徒然草』に再録。

9、但し、二四番歌「春ちかき」の本歌としてあげられている「千載集」の

匡房の歌は、「堀河百首」を出所とする。

10、日本古典文学大系の『歌論集・能楽論集』所収本による。

11、『新編国歌大観 私家集編I』による。以下、特記しない私家集の本文は同

書による。

12、『日本歌学大系 第五卷』所収本による。

13、注12に同じ。

14、注12に同じ。

15、以下、「徒然草」の本文は、日本古典文学大系『方丈記・徒然草』の本文による。

16、「夫木和歌抄」(一九三九)には採歌されている。

17、田辺周氏『徒然草諸注集成』ほかの諸注釈書。

18、以下、「堀河百首」の本文は、『新編国歌大観 私家集編Ⅱ 定数歌編』による。以下の定数歌なども同書による。

19、日本古典文学大系『和漢朗詠集・梁塵秘抄』による。

20、拙編著『兼好法師全歌集総索引』による。

21、拙著『徒然草 上』(日本の文学・古典編)。また、安良岡康作氏も、『徒然草全注釈 上巻』で、同様な推測を提示している。

22、「歳月と兼好」(秋山茂編『中世文学の研究』所収)。

23、早く『徒然草文段抄』が指摘している。

24、日本古典文学大系『源氏物語』による。

25、萩谷朴氏『平安朝歌合大成』による。

26、『新編国歌大観 勅撰集編』による。以下、勅撰集の本文は同書による。

27、『徒然草拾遺抄』も、先の「堀河百首」の紀伊の歌を指摘している。

28、注5の上野理氏の論考など。

29、三木紀人氏『徒然草』(全訳注)にも、この歌を引用する。

30、「徒然草」の和歌的世界をまとめたものに、斎藤彰氏の「徒然草の和歌的基盤(上)(中)(下)―表現機能と構成意識―」(学苑・第五二九号・第五四一号・第五五一号)がある。

31、拙稿「徒然草」の草木をめぐって(上) (岡山大学教育学部研究集録 第46号、昭52・2)

第71号、昭61・1)で論及した。

33、昭和58年、和泉書院出版。

34、『本堀河院御時百首和歌とその研究 古注篇』所収。

35、日本古典文学大系『万葉集』による。番号も同書のもの。

36、『日本歌学大系 別巻一』による。

37、注8の論文に同じ。

38、『類纂徒然草』付載の「自撰家集」の頭注。

39、注8の荒木論文。

40、『日本歌学大系 別巻二』による。

41、注1の著書の解題による。

(昭和六十二年十一月十六日受理)